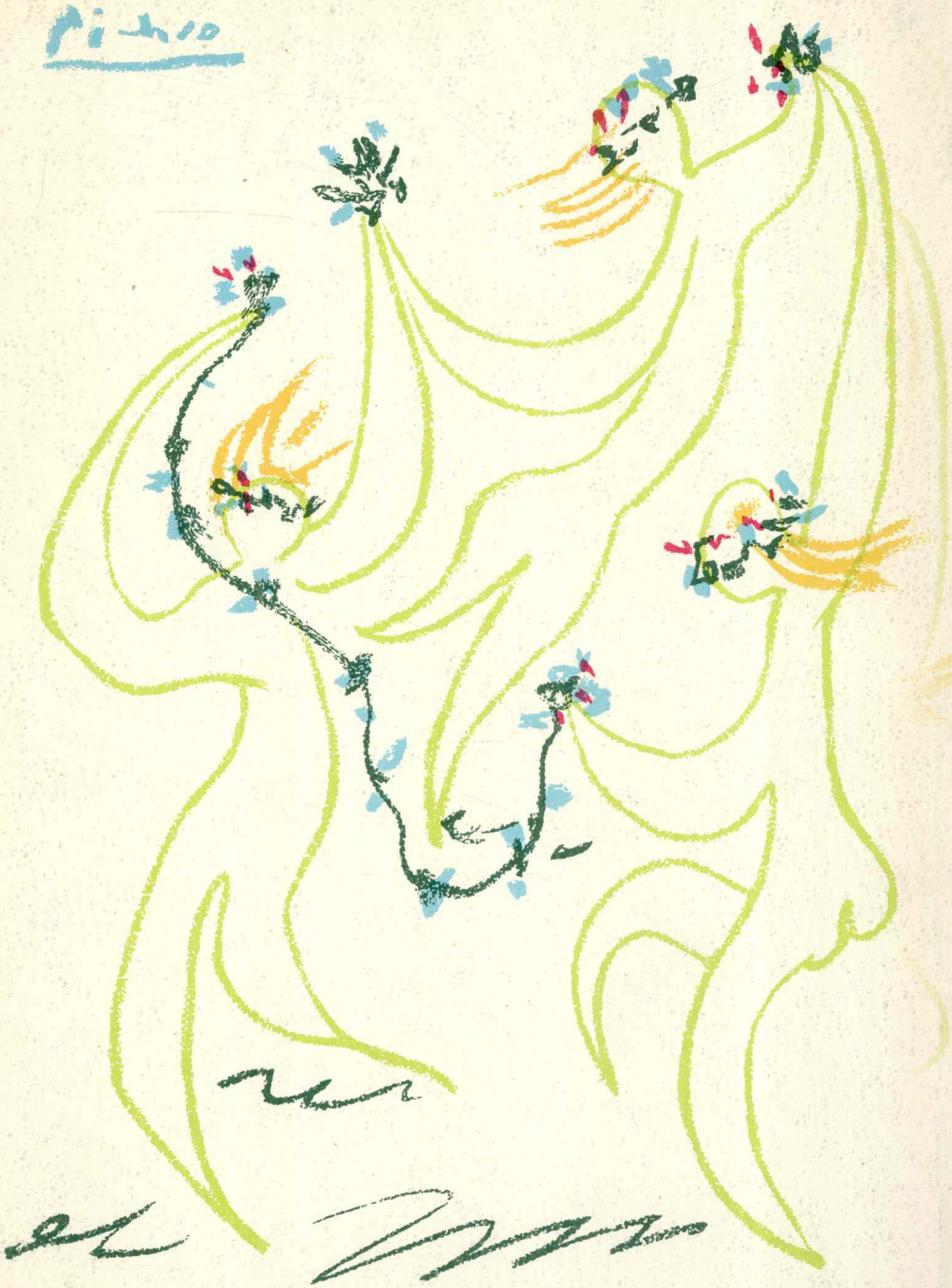
Picasso

ノーベル賞文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

主婦の友社

ノーベル賞文学全集　6

トーマス・マン
ゴールズワージ

訳者　佐藤晃一
浅井真男
渥美昭夫
清水　茂
円子修平
望月一雄
吉田健一

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和46年7月5日　発　行
発行者／石　川　数　雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台1-6
郵便番号　101
振　替　東京180番
電話　東京(03)294-1111(大代表)
印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙／日本クロス工業株式会社
クロス
製函／凸版印刷株式会社

お茶の水図書館蔵書

© 主婦の友社　1971　Printed in Japan
0397-522063-3062

編集顧問

川端康成

芹沢光治良

編集委員

高橋健二

佐藤亮一

白井浩司

山室　静

表紙装画

パブロ・ピカソ

装丁

原　弘

第6回日本翻訳出版文化賞受賞

ノーベル賞文学全集　全24巻　別巻1

1　シェンキェヴィッチ　キップリング　(訳)木村彰一　飯島淳秀
❷　ロマン・ロラン　イェンセン　(訳)宇佐見英治　山口三夫　河盛好蔵　竹内孝次
3　ポントピダン　ギェレルプ　シュピッテラー　(訳)林穣二　高橋健二他
❹　ハムスン　アナトール・フランス　レイモント　(訳)山室静　伊吹武彦　鈴木力衛　米川和夫他
5　デレッダ　ウンセット　S・ルイス　(訳)大久保昭男　稲富正彦　刈田元司
❻　トーマス・マン　ゴールズワージ　(訳)浅井真男　佐藤晃一　渥美昭夫
❼　ブーニン　パール・バック　シランペー　(訳)原卓也　村岡花子　佐藤亮一　桑木務
❽　マルタン・デュ・ガール　ピランデッロ　(訳)米川良夫　青柳瑞穂
❾　ヘルマン・ヘッセ　パウル・ハイゼ　(訳)高橋健二　小塩節
❿　アンドレ・ジッド　モーリヤック　(訳)若林真　片岡美智　堀口大学　白井浩司　井上究一郎
⓫　フォークナー　ラーゲルクヴィスト　(訳)速川浩　山口琢磨
⓬　ヘミングウェイ　(訳)石一郎　高村勝治
13　ラックスネス　カミュ　アンドリッチ　(訳)山室静　山口琢磨　渡辺守章　鬼頭哲人　栗原成郎他
14　パステルナーク　ショーロホフ　アストゥリアス　(訳)工藤幸雄　工藤精一郎　鼓直
15　スタインベック　アグノン　(訳)大橋吉之輔　村岡崇光他　⑫(71.9)
⓰　川端康成
17　ベケット　ソルジェニーツィン　(訳)安堂信也　水野忠夫他
18　ラーゲルレーヴ　メーテルリンク　ヒメネス　(訳)香川鉄蔵　川口篤　長南実他　⑪(71.8)
19　ビョルンソン　エチュガライ　ハウプトマン　ベナベンテ　(訳)毛利三弥　荒井正道　秋山英夫
20　イェイツ　ショー　オニール　(訳)高松雄一　福田恆存　倉橋健
21　モムゼン　オイケン　ベルグソン　(訳)長谷川博隆　氷上英広　松浪信三郎他
22　ラッセル　チャーチル　(訳)大竹勝　佐藤亮一
23　シュリィ・プリュドム　F・ミストラル　カルドゥッチ　タゴール　ヘイデンスタム　カールフェルト　(訳)川崎竹一　杉富士雄　河島英昭　福田陸太郎　田中三千夫　⑬(71.10)
24　G・ミストラル　T・S・エリオット　クワジーモド　サン＝ジョン・ペルス　セフェリス　ネリー・ザックス　(訳)荒井正道　福田恆存　河島英昭　多田智満子　秋山健　生野幸吉
別巻　ノーベル賞物語

(注)…数字は巻数(白抜きは既刊)、○印の数字は予定刊行順序、(　　)内は刊行年月。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

トーマス・マン

選考経過…シェル・ストレムベリイ……清水　茂訳…6
授与演説…フレードリク・ベーク……円子修平訳…11
受賞演説……円子修平訳…13

トリスタン……佐藤晃一訳…15

トーニオ・クレーガー……佐藤晃一訳…45

ヴェネツィアに死す……浅井真男訳…87

人と作品…ハンス・マイヤー……清水　茂訳…133

著作目録……清水　茂編…380

ゴールズワージ

選考経過…グンナー・アールストレーム……望月一雄訳…146
授与演説…アンダーシュ・エステルリング……吉田健一訳…148

資産家……渥美昭夫訳…153

人と作品…レイモン・ラス・ヴェルニャス……望月一雄訳編…369
著作目録……渥美昭夫 望月一雄編…385
肖像画／ミッシェル・コーヴェ……4、144
カラーさしえ／ミッシェル・ルーラルドル
（トーマス・マンの作品）……32～33、112～113、128～129
ミッシェル・ノー（ゴールズワージの作品）…176～177、224～225、288～289、320～321

トーマス・マン

一九二九年受賞（五十四歳）

（ドイツ　一八七五～一九五五）

トリスタン

トーニオ・クレーガー

ヴェネツィアに死す

トーマス・マン

受賞演説

トーマス・マンに対する ノーベル文学賞授与の選考経過

元パリ駐在スウェーデン大使館
文化参事官
シェル・ストレムベリイ

一九二四年に、トーマス・マンが五十歳になるかならないかでノーベル賞にはじめて推薦されたとき、彼の背後にはすでに豊かな文学作品が生みだされていた。それらの作品はベルリンの大きな出版社であるフィッシャー書店から十巻にまとめられて出版されたばかりであり、彼の世界的名声はすでにかなり以前から聞こえていた。名声はとりわけ、一九〇一年に刊行された『ブデンブローク家の人々、一家族の没落』という、あの若き日の見事な小説にもとづくものであった。この小説は、ドイツの中産市民階級の霊感によって生まれた自然主義文学の傑作としてひろく認められているが、トルストイや、幾人かのスカンディナヴィアの作家たち、キールラン[1]、リー[2]、ヤコブセン[3]、バン[4]ら――これらの作家たちをマン自身が自分の師のなかに数えている――の偉大な伝統につらなるものであった。彼の第二の大作である文学的創造『魔の山』が現代ドイツの作家のなかで彼の位置を第一級のものとして確定することになるのであるが、この時期には、まだ刊行の予告がなされたばかりだった。

トーマス・マンの仕事に関する報告――それはスウェーデン・アカデミー・ノーベル委員会のベール・ハルストレーム委員長によって入念に作成された――のなかで、たえず強調されているのは、一九二四年末の『魔の山』の刊行以後においてさえも、『ブデンブローク家の人人』だけで充分厳格にノーベル賞の授与を正当化し得るということであった。同じ作家の幾つかの短編・中編小説、とりわけ『トリスタン』、『トーニオ・クレーガー』、『ヴェネツィアに死す』などの見せる心理分析の異常な深さと高い芸術的格調にもかかわらず、他のいかなる作品といえども同じ資格を得るには値しないであろう。受賞者の作品のなかで明らかに一つの頂点を示し、その洗練された文体によってのちのマルセル・プルーストを予示しているがごとき『ヴェネツィアに死す』も、ベール・ハルストレームの目には、この作のいささかみだらな主題――美しい若者に対する老詩人の、プラトニック・ラブという語の意味するすべてのもの――によって損われており、文体に対する腕の冴えも、感情分析の精妙さも、彼の意見を変えさせるにはいたらなかったのである。「『ヴェネツィアに死す』の」このむこう見ずな企てがヨーロッパのいたるところに惹起した限りない讃嘆は、他の諸諸の事実とともに、一九一四年の戦争前夜のヨーロッパにおける精神の頽廃を雄弁に語っている危険な事実である。」のちの世代はこのような酷[ひど]しい批判をそのままにはうけとらなかった。

『魔の山』に関していえば、報告者は、たしかに、今日の時代を解明するのに役立つはずの諸思想の展開によせた深い関心と、象徴的な枠組――自立した一小世界を形成しているあの豪奢なサナトリウム――の巧妙さは認めているが、この作品が非凡な着想のものながら、芸術的観点からみればあまり成功しているとはいえないと考えざるを得ないのである。「ノーベル賞のごとき栄誉に充分に値する著者の傑作の数々にこの作「『魔の山』」を加えることは、問題になり得ないだろう。」それ故、スウェーデン・アカデミーは、受賞者の氏名と同時に公表された選考理由説明において、この限定つきの評価を自分のものとしたのである。一九二九年のノーベル賞はトーマス・マンに授与された、――と、こう述べられている、――「年ごとにしだいに、現代文学における古典的傑作の一つとしての評価を確立してきた彼の偉大な小説『ブデンブローク家の人々』をその主たる対象として。」

容易に理解し得ることだが――そして、一九六一年にフィッシャー書店から彼の書簡が出版されて以来、周知のことだが――他のどこでもきわめて強い関心と深い称讃とをもってうけ容れられている『魔の山』のごとき重要な作品をなおざりにし、黙殺してしまっているこ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

うした《前文》に、トーマス・マンはひどく驚き、いささか不快を感じさえしたのである。一九三〇年の、アンドレ・ジッド宛の一通の書簡で、彼は自分の苦情をながながと語っている、――

「私はいつでも」と、一九二六年のパリ訪問の際に出遭ったこの偉大なフランスの友に宛てて書いている、「小説とか、フィクションの作品とかではなく、理性と批判精神の所産であることこそ大切なのだということを明らかにしようと目ざしたこの作品について、数々のひどく非難のまじった批判を聞いています。この上なく奇妙なのは、ノーベル委員会にその発言が重きをなしている有力な批評家のフレードリク・ベーク教授が、この作品を芸術的に誤りであると公に規定したことです。それ故、賞はもっぱらと言わないにしても、主として、私の若き日の小説『ブデンブローク家の人々』を対象として、私に授与されたのでしょう。いずれにせよ、それがあきらかに誤りに誘い込まれてしまったアカデミーの中枢部の一般的見解なのです。『ブデンブローク家の人々』だけでは、アカデミーに私への授賞を可能にさせたり、それを決定させたりするほどの情勢を、けっしてつくりだしはしなかったでしょう。事実、この情勢は、まさしくこの断罪された小説によって生み出されたものなのです。私は強い確信をもっていますが、この小説の叙述上の特質は、作品に含まれている分析や哲学的論議と充分につり合っているので、その構成と芸術的価値とを際立たせているはずです。」

ところで、大きな報酬はなるほど五年後にしか彼に授けられなかったものの、トーマス・マンのノーベル賞候補への推薦は、すでに議論の多いこの小説の出版以前になされていたし、しかもたいそう好意的にむかえられていたことを想い出そう。この候補への推薦を、はじめて、しかも熱烈な讃辞をもってこころみたのは、ほかならぬドイツ文壇の長老、一九一二年のノーベル賞受賞者ゲルハルト・ハウプトマンであった。ハウプトマンはスウェーデン・アカデミーへの手紙で書いている、――現代のいかなる作家も、「最良のドイツ的特性を具現している完全に廉潔な、すぐれた人格であり、深く、しっかりと組みたてられた精神である」トーマス・マンほどに、授賞に値する資格をもちはしないであろう、と。

トーマス・マンがこの著名な先輩同業者の肖像を、それもむしろ戯画ふうに、『魔の山』のもっとも興味ある人物たちの一人、つねに高ぶった物言いをするオリュンポス人ミュンヘーア・ペーパーコーンのなかで、つくり上げていたこと――これは未来の受賞者が、のちに、モデルに明らかに罪障消滅の宣告を懇願することによって、間接に認めたことであるが――を、この時期にはハウプトマンはまったく知らなかったのだと信じなければなるまい。実際、この非難が公にされたとき、トーマス・マンは「現代ドイツ最大の作家を笑いものにして、危害を加え」たことをはげしく否認しており、見せかけとは思われない憤慨をこめて、数々の手紙の相手に、この非難は「いつわりの、ショッキングな、ひどいセンセーションをまきおこすことをはっきりと意図したもの」であると性格づけている。

いずれにせよ、ゲルハルト・ハウプトマンがスウェーデン・アカデミーに対して自説をくりかえすことは二度となかった。目下、このアカデミーの終身理事をつとめているアンダーシュ・エステルリング氏はこの事件を回想しているが、一九二九年にトーマス・マンの候補推薦がこの博学な学会の中枢部で必要な過半数をついに得たとき、氏はこの候補推薦をふたたび取りあげた唯一の人物だったのである。

同年の競争にならんだ多様な国々の二十四人の作家たちのなかで、なんらかの意味でトーマス・マンの資格に匹敵し得たかもしれない存在は、実際、ただ一人しかいなかった。ゲーテ賞を受けたばかりのド

1 アレクサンダー・キールラン。一八四九～一九〇六。イプセン、ビョルンソンらとともにノルウェーを代表する作家の一人。きわめて諷刺的で、同時に精神的な特徴を示し、充分に制禦された文体を見せている。代表作『ガルマンとヴォルセ』。

2 ヨナス・リー（一八三三～一九〇八）。キールランとともにノルウェーの代表的作家。弁護士。のちにパリに移り、社会問題に関心を示し、作品には厭世的傾向が見られる。『水先案内とその妻』その他の作がある。

3 イェンス・ペーター・ヤコブセン（一八四七～八五）。デンマークの作家。はじめ植物研究家であったが、詩を出版して、文学の世界に生きるようになる。『ニールス・リーネ』によってわが国にも知られている。

4 ヘルマン・バン。一八五七～一九一二。デンマークの作家。はじめ俳優でもあった。放浪生活を好み、米国での講演旅行の途次没した。作風は十九世紀末の雰囲気を映して暗く、『絶望の世代』その他の作がある。

イツの偉大な詩人シュテファン・ゲオルゲがそれであったが、これ自体、ようやく国外にもその特異な資質が知られはじめた抒情的天才へのややおくればせの叙階であった。けれども、かなり難解な彼の作品は――しばしば比較されるポール・ヴァレリーの作品同様に――限られたエリートの読者のためのものであったし、またつねにそうであるにちがいなかった。ポール・ヴァレリーとともに、ゲオルゲにノーベル賞をあわせて授与すべきだという提案が、数年後に、エステルリング氏によってなされたが、不運なことに実現しなかった。

トーマス・マン自身は、身についたものでない見せかけの謙虚さをもって、ノーベル賞受賞後に受けねばならなかった幾つかのインタヴューにおいて、二人の同国人リカルダ・フーフ[1]とアルノー・ホルツ[2]が自分のかわりにスウェーデン・アカデミーの好意を得なかったのは残念だと述べた。二流、または三流の作家であるアルノー・ホルツの候補推薦は、かなり以前から提案されてはいたものの、けっしてまじめに考慮されたことはなかったのである。この年、アカデミーはこのアルノー・ホルツのために、彼の生国である東プロイセン出身の幾人かの教授や作家の署名のある印刷された請願書を受けとっていた。『パパ・ハムレット』の作者は、その文書では、ドイツにおける自然主義運動の先駆者であり、異議のない巨匠であると紹介された。不幸なことに――あるいは、幸いなことに――彼はトーマス・マンを選定することになった投票の数週間まえに死んだ。トーマス・マンは、じつに口にするのも驚くべきことだが(mirabile dictu)、この件に関してなんの懸念も抱かずにいたわけではなかった。ゲルハルト・ハウプトマン宛の一通の書簡で、彼はほとんど危険のない自分の競争相手について、つまりアルノー・ホルツへのノーベル賞ということについて、こう述べている、――「これは馬鹿げたことであり、醜聞です。ヨーロッパ全体がまったく途方にくれて、頭をかかえこんでしまうにちがいありません。」おそらく、スウェーデン・アカデミーは受賞者の選考で幾度か過ちをおかしたが、この度は、懼れは根拠のないものであった。選考は終わり、そしてそれは正しかった。世界じゅうの新聞が実際に率直な同意を示して、それを認めた。

一人のノーベル賞候補と称される名前をめぐって、とくにドイツの新聞で提起されたはげしい論戦を、記録にとどめておこう。その名は戦争小説『西部戦線異状なし』の著者エーリッヒ・マリア・レマルク[3]であり、まさにこの一九二九年に、この小説は国際的なベストセラーとして世界じゅうをかけめぐったのである。この候補推薦はけっして先送りされ得るような仕方で申し出られたものではなく、それに、場合によっては生じるかもしれない報酬(ノーベル賞受賞)に対するドイツ将校協会の憤激のまじった抗議はあたりどころがなかった、――まさしく、平和主義的傾向の一作家をさらし台にはりつけにでもするのでなければ。

ところで、ドイツの新聞で、トーマス・マンのノーベル賞に敬意を表していた讃辞の合唱に、幾つかの調子はずれの音がまじり込む。彼の作品の高い文学的価値が問題にされるわけではないが、彼の政治思想の変化が首都の幾つかの保守的な大新聞の気に入るという好運に恵まれなかったのである。「戦時にはまだフリードリッヒ大王を称揚していたあのトーマス・マンが、民主主義が新たなドイツの政体になると、もう、民主主義の走り使いになった」と『ベルリン地方報』紙は書いて、新政体が彼にあびせたあらゆる種類のお世辞によって彼がこの民主主義の擁護者たちのなかに名前を登録されるままになっていたことを非難している。ヒトラーの《第三国家》――それは当然トーマス・マンの衷に好敵手を見るはずであった――の到来もすでに間近に感じられた。

フランスの新聞はたんにすぐれた作家であるばかりか、また偉大なヨーロッパ人でもあるドイツの新しい受賞者に、こぞって讃辞をささげている、――なるほど、同年のフランスの受賞者、ノーベル物理学賞のルイ＝ヴィクトール・ド・ブロイ公爵のかがやきをいっそうかがやかせるために、彼のかがやきが充分に伝えられなかったにせよ。

「ノーベル文学賞は、学識ある全ヨーロッパが尊敬し、称讃している作家に授与される」と未来のアカデミー会員ダニエル・ロップス氏は『レビュブリック』紙で断言している。「フランスがまだ充分に彼のことを知らず、――まだ『トリスタン』、『ヴェネツィアに死す』など限ら

れた作品しか訳されていない――また、彼の主要な作品を知らないとしても、『ブデンブローク家の人々』や『魔の山』のような作品を知った暁には、フランスは文句なしに称讃するであろう。」

文学雑誌においては、彼はフローベールやモーリス・バレスと比較され、彼とアンドレ・ジッドやポール・ヴァレリーとの友情の絆が想起される。「全世界がスウェーデン・アカデミーのこの決定を称讃するだろう、全世界とドイツが」とマリウス・ボワッソンは『コメディア』誌に書く。「彼の運命がそれを彼にさし出すとき、それは詩人の返報である。彼は自国においてはすべての投票を一致させ、自由に予言することができるのだから。人は彼の衷に芸術家と同程度に独立的人間を愛し、尊敬している。」

ほとんどアンドレ・ルソー氏だけが『フィガロ』紙で、ラインの対岸のこの魔法使いとその危険な誘惑に対して自国フランスの人々の注意を喚起する必要があると信じている、――

「ヨーロッパ人トーマス・マンを、彼のありのままとはべつな人物と見做さないようにしよう」と彼はトーマス・マンの作品に関する長い、洞察力に富んだ分析の末尾で叫んでいる。「彼の思想には、価値ある現実主義と空想的なイデオロギーに対する有効な不信の念とが見られ、一部の若い革命家たちがほどなく滅びるであろうと予告したブルジョワ思想にくみする反撥が見られる。そして、トーマス・マンの作品に統一を与えているこのブルジョワ芸術、自発的に文明を志向しているこの芸術は、ゲルマン的作品がわれわれをひどく誘惑するときに感じさせる特性であるあの古きドイツという一面をもっている。けれども、彼がうち建てようと希っているヨーロッパに対して、幻想を抱かないようにしよう。このヨーロッパはベルリンを首都とするにちがいない。パリやローマは二流の地位に置かれるだろう。ノーベル賞によって叙階された彼の才能は、彼を世界的な芸術家たちの列に加えたのであり、その会衆はたんに一国の内部に預けられてはいないのである。けれども、もし彼をきわめてすぐれた誰かべつなドイツ人と比較しなければならないとすれば、彼はゲーテによりはむしろヴァーグナーに似ている。ヴァーグナー、彼もまた、ヨーロッパを征服した、たんにマイスター・ジンガーの人物たちにヨーロッパを吟遊させるためばかりでなく、ニーベルンゲンの叙事詩とヴァルキューレの誇らしげな合唱とをヨーロッパじゅうにひびかせるために。」

これこそはニュアンスに富んだ適切な批評であり、すくなからぬ真実を含んでいる。たとえ、のちにトーマス・マンが自国を追われ、ドイツ国籍を失ったために、百パーセント世界市民たらざるを得なくなり、たしかにアメリカに帰化しながら、つねによきヨーロッパ人として底意のない行動と言葉によって人間の権利と権威とを擁護しようとするとしても。

トーマス・マンがスウェーデン国王の手から賞を受けるために家族の全員と赴いたストックホルムで、彼は数々の讃辞と共感の表明とでむかえられた。市の音楽宮殿におけるノーベル賞授与式は、のちの国連事務総長ダグの父にあたる元首相ヒャルマル・ハマーショルドによって司会された。そして、スウェーデン・アカデミーを代表して、文学賞受賞者の栄誉をたたえて講演したのは、すでに著名なベーク教授である。彼は言っている、――

「トーマス・マンは前世紀のイギリスやフランスやロシアの巨匠たち、ディケンズとサッカレー、バルザックとフローベール、ゴーゴリとトルストイらの傑作と比較し得る、最初の、そして今日までの唯一の、規模の大きいリアリズム小説のドイツの作家である。」

1　一八六四～一九四七。ドイツの女流詩人、小説家。『弟ルドルフ・ウルスロイの想い出』、『凱旋横町』など長編の作がある。ナチズムの時代にも毅然たる態度を持し、マン兄弟排斥を理由に自らの属する「文学アカデミー」に辞表を出した。トーマス・マンは彼女を「ドイツのファースト・レディ」と呼んでいる。

2　一八六三～一九二九。ドイツの自然主義作家。徹底した自然主義の立場をとり、『パパ・ハムレット』を匿名で発表。

3　一八九八～。一九四七年以降アメリカに帰化したドイツの作家。第一次大戦参加の体験にもとづき、戦争の無意味さを訴えた作『西部戦線異状なし』をはじめとし、時代の動きのなかで人間を語った数々の作がある。

4　一八六二～一九二三。フランスの作家。代表作『自我礼讃』によって個人の自我に至高の意味を見る立場を確立し、のち、ここから民族主義、愛国主義の立場を発展させた。

おごそかな授賞につづく祝宴の際に述べられたトーマス・マンの返答は、自分自身の価値を正当とする意識のはっきり見られるものであった、――

「ノーベル賞が私に授与されたことは」と彼は言っている、「私個人にとってこの上なく満足です。ゲーテは言っています、――愚か者だけが謙虚だ、と。これはきわめて偉大な人物の言葉ですが、かならずしもつねに正当化されているとはかぎりません。けれども、私とすれば、謙虚ということにもまたなにかしら熟練によってなすべきものがあると思われます。私のためにいただいた讃辞は、私にとって自惚れの源にはならないでしょう。私はそれをわが国民の足許に置きます。それは、つねによく理解されたわけではなく、つねに完全に理解されたわけではないわが国民に、満足をもたらすでしょう。」そのまえに、彼はドイツ国民をあらゆる方向から飛んできた矢に射しつらぬかれた聖セバスチャンになぞらえている……

その夜の花形の立場をトーマス・マンと分けあったノーベル物理学賞の若きド・ブロイ公爵が彼のすばらしい隣席の人、のちのデンマーク王妃となるスウェーデンのイングリッド王女との会話にあれほど熱中しなかったならば、本来は主としてそこに居合わせる全受賞者を代表して述べられるべきだったこのきわめて個人的な「トーマス・マンの」談話に、おそらく、彼は多少の言葉を加えただろう。

ストックホルム訪問中に、トーマス・マンは彼が手がけている新しい小説、聖史の題材を扱っている『ヨセフとその兄弟』の数章を公衆の前で読むことを熱望していた。一九三四年から一九三六年にかけて四巻に分けて出版されたこの小説は莫大な文学創造の新しい時期の端緒となる。この時期には、着目すべき大小のさまざまな作品のなかで、真に歴史の再構築という力業である『ヴァイマールのロッテ』に見られるオリュンポス神ゲーテの驚嘆すべき、まことに生き生きとした肖像をわれわれにもたらしてくれたのである。次の事実はもはやアカデミー内の秘密ではない――というのは、アングーシュ・エステルリング氏がつい先頃それを明かしたから。――一九四八年に、トーマス・マンは「彼のその後の重要な創作のために」スウェーデン・アカデミーの他の二人のメンバーによって二度目のノーベル賞の提案があったのである。この提案はノーベル財団内部で、同一人物に同一分野で二度のノーベル賞授与が可能かどうかという活気ある議論をひきおこした。導き出された結論は、これは創設者の遺言によって定められた規約に合致していない、また、ひき合いに出された前例はキュリー夫人の場合で、彼女はたしかに一九〇三年と一九一一年の二度受賞してはいるが、それは二つの異なった賞であり、一つは物理学賞――しかも彼女はそれを自分の夫、およびベックレルと分けねばならなかった――であり、もう一つは新しい数々の発見のための化学賞で、その名誉は彼女だけに帰するものであるから、この例は決定的ではないということであった。

ノーベル財団がその設立五十周年に際して、一九五〇年に刊行した大冊の記念誌において、エステルリング氏は問題の焦点に触れ、特に『ブデンブローク家の人々』の著者にばかりでなく、『魔の山』や彼の円熟した日々における他の諸々の傑作の著者に対する讃辞を補充して、こう述べた、――

「この百科全書的小説の価値は、歳月がそれに授けた古色によって増大した。そのジャンルにおいて、この小説はトーマス・マンがブルジョワの大きな一家族にささげた若き日の小説に、おそらく、完全に匹敵する。けれども論争は拡大し、目下のところ、それは比較の材料にこと欠かない。トーマス・マンはノーベル賞の受賞者として、受賞後に、新たに豊かな数々の作品を創造したまれな存在の一人である。それらのうちの幾つかは亡命中に、最大限の自制、さながらほとんど超人的ともいうべき持久力を要求される状況のなかで創られたものである。」

（清水　茂訳）

トーマス・マンに対する ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

ノーベル文学賞選考委員
フレードリク・ベーク

一九二九年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士各位

もしひとが、十九世紀は文学の分野でどのような革新をなしとげたか、遠くギリシアに根ざす叙事詩、劇、抒情詩の古い諸形式にくわえてどのような新しい形式を創造したか、を問うとすれば、その答えは「写実小説」であるにちがいありません。写実小説は、人間の魂のもっとも深く秘密な諸経験を同時代の社会条件という背景のなかに置き、普遍と特殊との相互依存を強調することによって、古い文学にその匹儔を求めることができないような、信頼に値する精緻と完璧とをもって現実を描写することができたのでした。

写実小説――これは歴史主義と科学の影響をうけた近代散文叙事詩と呼んでよいと思いますが――、写実小説は概してイギリス、フランス、ロシアの作家たちの創造にかかるものでありました。写実小説はディケンズ、サッカレー、バルザック、フローベール、ゴーゴリ、トルストイの名と結びついております。ながいあいだドイツからはかれらの仕事に匹敵するような寄与が行なわれませんでした。詩的創造力はドイツでは別の経路を辿ったのです。こうして十九世紀が終わったとき、あの古いハンザ同盟都市リューベックの商人の子である二十七歳の青年作家が、その小説『ブデンブローク家の人々』を公刊したのでした。それ以来二十七年が経過しました。そして『ブデンブローク家の人々』はあの空白を塡める傑作であることがあきらかになったのです。ここにヨーロッパのコンサートのなかに異論の余地なく、かつ、対等に位置を占める、雄渾な様式をもった最初の、しかもいまだにこれを凌駕するものを見ないドイツ写実小説があります。

『ブデンブローク家の人々』は一つのブルジョワ小説であります、それというのも、この小説が描いている世紀はなによりもまずブルジョワの世紀だからです。それは観察者を当惑させるほど巨大でもなく、彼を窒息させるほど狭隘でもない社会を描いています。この中位の社会は絶好の、知的で思いやりのある微妙な分析の場を提供します、そして、温和で成熟し洗練された反省が、創造力、つまり叙事詩的に物語ることの愉楽をかたちづくるのです。われわれはブルジョワ文明をそのあらゆるニュアンスにおいて見ます、われわれは歴史的地平、時間の推移、世代の変遷、おのれを恃み、力に満ち、自意識に煩わされない性格が、しだいに洗練された繊細な感受性をもつ内省的なタイプに移ってゆくのを見ます。その叙述は明晰で、しかも表面にとどまることなく、生の隠れた過程にまで達しています、それは力強く、しかしけっして粗野になることがなく、微妙な事象に軽妙に触れます、それはもの悲しく真摯ですが、けっして陰気ではありません、それというのもそこには、アイロニカルな知性のプリズムに多彩に煌めく、静かな深いユーモアのセンスが滲透しているからです。

一社会の描写、現実の具象的客観的再現として、『ブデンブローク家の人々』はドイツ文学にほとんど匹敵するものをもちません。しかしこの小説は、そのジャンルの限界を越えて、ドイツの心性、すなわち形而上学的音楽的超越主義と共通の特徴をしめしています。文学におけるリアリズムの技法を薬籠中のものにしたあの若い作家は、その胸裏においては、ショーペンハウアーのペシミズムとニーチェの文明批評とに回心した者だったのであり、小説の主要人物たちはかれらの窮極の秘密を音楽のなかに明かしているのです。

『ブデンブローク家の人々』は根本的には哲学的な小説であります。一家族の没落は、生の本質と条件への深い洞察は生きる歓びや活動的

なエネルギーとは両立しない、という観点から描かれています。反省、自己観察、心理学的洗練、哲学的深さ、審美的感受性は、若いトーマス・マンにとって破壊的分解的な力と思われたのでした。彼のもっとも精妙な物語の一つである『トーニオ・クレーガー』(一九〇三年)のなかに、彼は単純な人間生活によせる彼の愛の感動的な言葉を書いています。彼は彼が描くブルジョワ世界の外に立っているために、彼の想像力は自由です、しかしそのためにまた彼には失われた素朴への郷愁的な感情があります、そしてこの感情が彼に理解と共感と尊敬とをあたえるのです。

『ブデンブローク家の人々』に深い響きを生じさせているマンの青春の苦痛に満ちた経験は、その後彼が作家としての生涯を通じてさまざまに取り扱い、解決しようとつとめてきた一つの問題を含んでいます。マンは彼自身のなかに、審美的哲学的視界と実用的ブルジョワ的視界との緊張を感じ、これをいちだんと高い段階で調和させようとつとめたのでした。短編小説『トーニオ・クレーガー』と『トリスタン』(一九〇三年)のなかで、生からの亡命者たち、芸術、認識、死の信奉者たちが、単純で健康な存在、「誘惑的に卑俗な生」への欲求を告白します。かれらを通じて語っているのは、単純で幸福な人々に対するマン自身の背理的な愛なのです。

象徴的な物語を写実的な形式につつんだ長編小説『大公殿下』(一九〇九年)のなかで、彼は芸術家の生を行動の人の生と和解させ、その人間の理想に「高貴と愛――それは厳格な幸福である」という標語をあたえました。しかしこの綜合は『ブデンブローク家の人々』や、短編小説における反立ほど説得的ではありませんし、またそれほど深く体験されたものでもありません。道徳家サヴォナローラと審美家ロレンツォ・ディ・メディチとが妥協の余地のない敵対者としてあらわれるドラマ『フィオレンツァ』のなかでその間隙はふたたび開きます。それは『ヴェネツィアに死す』(一九一三年)において悲劇的な意義を帯びるに到ります。彼がフリードリッヒ大王の個性に関心を寄せ始めたのは、この時期、第一次大戦に先行する数年のあいだのことでした。彼はこの統治者がこの問題の歴史的に有効な解決をしめしていると感じました。フリードリッヒの天才は、挫折を知らぬ活力をもって、行動と瞑想、そして幻想のない透徹した明晰を結合しているからです。堂堂たるエッセー『フリードリッヒと大同盟』(一九一五年)のなかで、彼はこの解決の可能性と現実性とを提示しました、しかし『ブデンブローク家の人々』の問題的な作家は、この理想を文学の造型的で生き生きとした形式のなかに表現することには成功しませんでした。

第一次大戦とその結末とはトーマス・マンに、美の観照、その精緻な分析と微妙なヴィジョンの世界を去って、実際的な行動の世界にむかうことを強制しました。彼は『大公殿下』のなかにある彼自身の忠告にしたがって、安易と快適を斥け、祖国がその苦悩の時にあたって直面している諸問題の痛苦に満ちた精査に献身したのです。彼の最近の諸作品、とりわけ長編小説『魔の山』(一九二四年)は、彼の弁証法的個性が、諸見解を表明するに先立って、窮極まで追究した諸観念の葛藤を実証しております。

トーマス・マン博士――ドイツの作家、思想家としてあなたは、すすんで現実と相かかわり、諸概念と格闘し、芸術が疑わしいものであることを確信しながらもなお苦悩に満ちた美を創造されました。あなたは詩と知性の孤高を、人間と単純な生とを熱望する愛と和解させたのです。どうか、スウェーデン・アカデミーが敬意をもってあなたに授与した賞を、国王陛下の手からお受けとり下さい。(円子修平訳)

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com